

松本さんは、北海道の大学を卒業された後、他県の福祉施設で働き始めました。

そのころの様子を著書『その花が咲くとき』の中でこのように回想されています。

初めて就職した障害者施設は、他県にある通所施設でした。

ここで働いた数年間の経験は、その後の私に障害者施設のあり方について考えさせられる、大きなきっかけになるものでした。

出勤初日、所長に呼ばれ、

「言うことを聞かない時はひっぱたくように」と言われました。

実際現場に出てみると、先輩の職員も手を上げています。

「あなたもやらないと、なめられるよ」

「あなただけ優しくすると、混乱させて可哀そうなんだから」

そんなことを言われてきました。

～中略～

「できません」と所長や先輩に意思表示をしました。

「なんで？」と返されたので、

「ここにいる人はみんな自分より年上です。長く生きていることは尊敬すべきことと考えています。尊敬する相手には手を上げられません。たたいて教えるということですが、自分を上回る腕力や暴力が出現したら、教育的効果はないのではないのでしょうか」と答えました。

待っていたのはいじめでした。

「せっかく教えてやったのに生意気」というレッテルを貼られ、定時になると所長も先輩も引き上げてしまい、残業を延々と一人でやらされることになりました。

とっても苦しい時期でした。自分の意に反して所長や先輩に頭を下げ、「生意気を言ってすみませんでした。今日から心を入れ替えて、ちゃんとひっぱたくようにします」と宣言すれば、この苦しさから解放されることは分かっていました。

「でも、できない。いじめられるのも嫌だ」

自分の心が壊れそうでした。

～『その花が咲くとき』（ホシツムグ刊）より～

現在、埼玉県にある「社会福祉法人みぬま福祉会」の総合施設長としてその人らしさを大事にした温かな実践を続けている松本さん。北海道のみなさんと一緒に松本さんのお話を聴きたくて、今回北海道にお招きいたしました。ぜひご参加ください！